

8月16日 年間第20主日 マタイ15章21～28節 イエスのうれしい誤算

先週の福音のあと、ファリサイ派や律法の専門家の人々との間で「清め」についてのやりとりがあります。自分たちは清い、だから食事の前には手を洗い、けがれたものが入らないようにしなければならないというのは衛生上の問題ではなく、彼らにとっては自分たちが清ければいいという考えでした。今日の箇所はそれに続いて彼らが「けがれている」と考えていた異邦人の女性の話です。

イエスが行かれたティルスやシドンは異邦人の町でした。そこに生まれたこの女性はカナン人で、もともとパレスチナ地域に住んでいた民族でユダヤ人ではありませんでした。つまり、イスラエルの神を信じていない異邦人だったわけです。しかし、それにしてもイエスの態度は冷たすぎると思いませんか？

イエスは病人や障害者、貧しい人々、罪びととされていた人々をいやされ、神の愛を告げられました。つまり「イスラエルの失われた羊」に対する宣教を自分の使命とされたのです。イスラエルの神である父の子であることを自覚されていたイエスにしてみれば当然のことだったでしょう。また、いやしの奇跡は病人と社会を隔てていた壁を取り除き、イスラエルの共同体に復帰させるためのわざでもありました。単に「不思議な力で病気を治してくださる人」というイメージが広がるのを恐れられたのかもしれませんが。

このとき、カナンの女性は「主よ、ダビデの子よ」とイエスに呼びかけました。これはイエスがメシア、救い主であることを表す呼びかけです。イエスも弟子たちもこれはイエスに答えてもらうための方便だと考えたのでしょうか。しかし女性は必死に叫び続けました。それでイエスと話すことができました。

それでもまだイエスは「子供のパンを子犬に与えるのはよくない」と言って断ろうとされます。これまた冷たい言葉のように聞こえます。イエスは自分の第一の使命は同胞であるイスラエル人に対する宣教であることを彼女に告げられたのです。しかし彼女はなおも引き下がりません。「わたしたちは異邦人です。けれどもあなたの父の愛のおこぼれをいただいてもいいではありませんか」という思いだったのでしょうか。イエスは「あなたの信仰は立派だ」と言って彼女の娘をいやされます。聖書には淡々と書かれていますが、イエスはここで彼女の信仰に深く感動されたのではないのでしょうか。

わたしはこの出来事はイエスの宣教計画に大きな影響を与えたのだと思います。イエスはこの女性と出会って「異邦人にも父なる神の愛を求めている人がいるのか」という思いを抱き、ユダヤ人だけでなく異邦人にも神の教えを告げなければならないと考え直されたのです。これはイエスにとってうれしい誤算だったのではないのでしょうか。この思いはのちにパウロや弟子たちによって実践されます。わたしたちにも教会の外で神の愛を求めている人との出会いが用意されているはずです。

(柳本神父)